

「B 書くこと」

書く勉強はあまり好きではないな。だって、何を書けばいいか分からない……。



書きたいことはたくさんあるけれど、書き方がよく分からないな。思ったことや考えたことをそのまま書けばいいといわれても……。

「思ったことをそのまま書けばよい」「話すように書けばよい」などの抽象的な指導では、書くことの「わかる・できる授業」にはつながりません。
前回と同じように、まず、学習指導要領の「書くこと」を中心にじっくり読んでみましょう。



「書くこと」

- 論理的に思考し表現する能力を育成する観点から、系統性や発達段階を踏まえた指導事項となっている。
- 文や文章を記述するだけでなく、「課題設定や取材」「構成」「記述」「推敲」「交流」などの一連の過程全体を通して育成していくことを重視している。
- 相手や目的、意図に応じて適切に表現する能力を重視し、日常生活で必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想などの言語活動を具体的に例示している。
- 書くことに対しての抵抗感を少なくし、楽しみながら書くことができることや、「書いて伝える」ことの意義が実感できる指導の工夫が求められている。
- 他の領域と同じように、指導事項は、**螺旋的**かつ**反復的**な指導を繰り返しながら、小学校と中学校の9年間で書く力の育成を図っている。



他の領域に比べると、単元を貫く言語活動を設定しやすいので、**児童生徒の意欲の向上、身に付けさせたい力に最適な言語活動**ということに留意して、単元や授業を構想してください。

単元構想において

- 児童生徒が、書いてみたいという意欲がわく題材
 - ・ 日常生活と関連のある題材
 - ・ 経験したことをもとにした題材
 - ・ 実態を考慮し、興味関心のある題材
 - ・ 複数の中から、児童生徒が選択する題材
- 相手意識、目的意識が明確になる具体的な言語活動を設定
 - ・ 手紙 リーフレット 紹介文 新聞
- 書き上げた作品をお互いに読み合う時間を設定
 - ・ 交流 伝え合い 相互評価

1時間の学習過程において

導入（めあて）でのポイント

- めあては、学習指導要領の指導事項から焦点をしぼり、児童生徒が理解できる言葉で提示する。
 - ※ 教科書教材文を学習する時間の場合、めあての達成が書くときに必要な力につながることを児童生徒に意識させる。

展開（活動）でのポイント

- 児童生徒が主体的に活動できる工夫をする。
 - ※ 構成を考える → 付箋を活用
 - 段落を考える → 短冊を活用
- 個別指導が必要な児童生徒へは、既習事項を具体的に示す。
 - ※ 文章の型 → 主語、述語の関係 修飾語 接続語
 - 文章構成 → はじめ、なか、終わり（序論、本論、結論）
 - 起承転結 5W1H

- 発展的な課題を準備し、早く終了した児童生徒が何もしないという時間をなくす。

終末（まとめ）でのポイント

- めあてとの整合性をもたせる。
- 作品を評価する時は、評価の観点を明確にする。

定着確認シートの条件作文を行うことにより、書くために身に付けさせなければならない力が見えてきます。是非活用ください。

